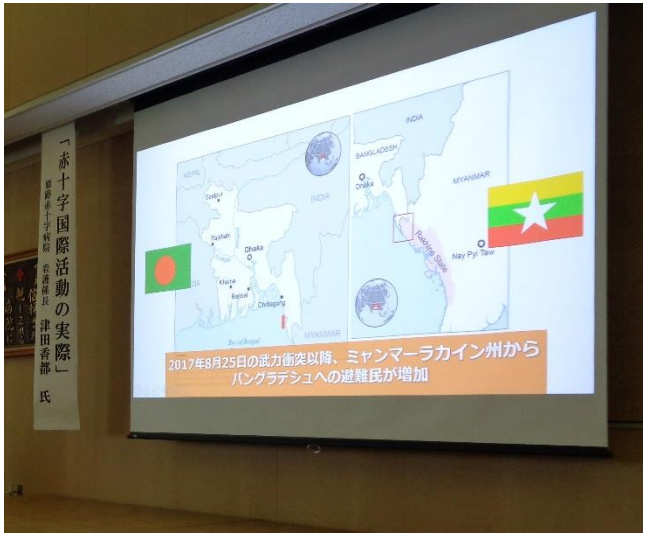
# 特別講演「赤十字国際活動の実際」を聴講して

学校祭と同日、姫路赤十字病院看護係長　津田香都さんをお招きして「赤十字国際活動の実際」についてお話をしていただきました。津田さんは、イラククルド地域、バングラディシュ、フィリピン、ハイチ、南スーダン、レバノンなどで国際活動を経験をされています。2017年のミャンマーでの武力衝突の影響で、ミャンマーからバングラディシュへ多くの人々が避難しました。そのバングラディシュに2017年と2018年の２回派遣され、避難民に対する、緊急救援、復興支援を行なった経験を詳細に教えていただき、大変興味深い内容でした。



聴講した学生の感想レポートの内容を抜粋しました。

赤十字の国際活動というと、医療活動を行うことだと考えていたが、緊急救援、復興支援、開発協力、国際人道法の普及等があると知ることができた。

「現地入りしたらまずアセスメントをする」「話合いをかかさない」と言われていて、状況を見極め支援の内容や方法を決定すること、コミュニケーションをとること、情報を共有すること、他部門との連携を行なうことが大切であることがわかった。これは看護をする上でも大切な事だと思いました。

安全な水の確保や、トイレの整備、食料の確保がされていないなどの環境の悪化や栄養不良が、感染症や病気につながり、多くの人々を苦しめているのが分かりました。

今年の５月に大阪赤十字病院主催の国際活動体験ツアーに参加した際、クリニックのレイアウトを考える機会がありました。入り口から出口まで一方通行、薬品・金庫を置く場所等考えることがとても難しく時間がかかりました。実際に現地に行き、早期に診療所を開設・診療を開始するのは大変なことだと思いました。

国際要員がいなくなっても指導内容が継続していくように、現地のスタッフやボランティアを指導し、その方々が地域住民に指導するようにしていること、小さな子どもをはじめ現地の方に理解していただくためイラストで分かりやすくするなどの配慮をしたり、必要物品を配布するなどの活動をしていることがわかりました。

診療所の入り口を男女別にしたと聞き、その地方の文化や風習などを尊重した関わりが必要であると感じた。

災害医療論の授業で、精神的支援のニーズが高いことを習ったが、講演でも、心理社会的支援（PSS）を、支援の３本柱（巡回診療-母子保健-心のケア）に入れており、被災者はもちろん支援者の心理面を考慮し支援していくことが大切であると感じた。

家族を目の前で殺された人、家族の行方がわからない人、現在も銃弾による怪我や下痢性疾患、低栄養や脱水などで苦しんでいる家族を抱え何もできず悩んでいる人たちの、心のケアは急務で、とても大切なことだと感じた。寄り添い傾聴することが基本で、夫を亡くした女性の会や男性の会などを開いたり、プライバシーに配慮した心のケアが実施されていることを知ることができた。

学ぶ機会や楽しむことが制限されている子どもたちへの心のケアとして、子どもたちが集まることができる場所を作り、一緒に絵を書いたりレクレーションをするなど発達段階に合わせた遊びをする、自分で安全を守るための教育をするなど、学びや楽しみを提供していることが印象的だった。

津田さんが避難民にかけた「無理して話す必要はないよ、来たい時に来て。」という言葉が印象に残っている。残酷な経験をしたが、すぐに話を聞いて欲しい人ばかりでなく、今まで集まることを禁止されていたが、これからは集まることができ、話したい時にはいつでも話をきいてもらうことができる場所があることを伝えることで、不安を軽減できると学んだ。

動画の中で、国際要員（苫米地さん）が「言葉がわからなくても、その人の苦しみや悲しみがわかる」と言われていた。言葉が通じなくても相手の状況をおもんぱかり、相手がどう思っているのかを感じとることが大切だと思った。感情や思いは、言葉以上に表情や仕草などの非言語コミュニケーションによって伝わるものであるため、言語が異なっていても、看護の対象に対して、思いの表出を助け、理解することに努めることは変わらない。

難民キャンプに行く班に母子保健（MCH）担当メンバーが入っていることが印象深かった。戦争や武力衝突が起こっている危険な中、不便な難民キャンプでの生活は、妊婦にとってとても不安が強い。伝統的産婆の方に、正しいケアや緊急時の対応などの指導を行いつつ、大変な状況下でも妊婦がリラックスして過ごせるよう配慮しているのが素晴らしいと思った。母体が脱水や栄養不良を起こすことで母乳分泌が低下し、児の命の危険や、発達・成長の遅れがでる可能性もあり、産後の訪問指導、授乳・育児指導も重要だと感じた。

国際活動での看護師の役割は、診療所での受け付け、バイタルサイン測定、トリアージ、カルテの管理、薬剤の管理、疾病予防や衛生指導など多岐にわたることがわかりました。持てる知識や技術を活かし臨機応変に活動する必要性を感じました。

赤十字の“誰かのために何かできることをする”人と人とのつながりを大切にし、お互い苦しんでいる時、助け合うことができたらと思う。

動画の中で「危害に遭い傷ついた心に寄り添うのは簡単なことではない」とあった。すべてを感じとれなくても、その人達のために何か行動を起こすことが心に寄り添うことに近づけると考える。学生の私たちにできることは少ないが、世界で何が起こっているのかを日頃からアンテナを張って知ること、授業で看護の知識を蓄え定着させるなど実行できるところから行動し、いつか国際活動を行いたいと思った。

日頃の講義などでは知ることができない、国際活動の実際について教えていただき、国際活動に関してイメージがわき、興味を持てた学生が多くいました。貴重な講義ありがとうございました。